明治近代化とオヤトイ外国人

阿部珠理　ABE Juri

阿部珠理先生は本学社会学部社会学科をご卒業の後，UCLA大学院で研鑽を積まれて，1989年4月に立教大学一般教育部教員として本学に戻ってこられました．その後大学組織改革の嵐が吹き荒れ教員の学内所属が目まぐるしく変わる中で，社会学部教授になられると同時に1998年の文学研究科比較文明学専攻立ち上げに参加され，創設教員のひとりとなられました．専攻ではカルチュラルスタディーズの旗手として教育研究の中心的役割を担われ，厳しくも暖かい指導で多くの院生を育てられました．その傍ら博士学位論文のご著書を出版されるなど目覚ましい研究成果も挙げておられます．社会学研究科に戻られた後も，一貫して比較文明学専攻の教育に携わってこられました．ご研究の中心テーマはアメリカ先住民研究で，綿密なフィールドワークに基づき，近代化された立場と違った視点から現在のアメリカ合衆国に関する示唆に富んだ知見を展開しておられます．この3月で定年退職を迎えられることを機に，特別寄稿をいただきました．（文責・佐々木一也）

本稿は，筆者の共編著*Japanese Civilization in the 21st Century* (New York: Nova Science Publishers, Inc., 2016) 中の拙論 “The Making of Modern Japan and Western Civilization” を翻訳，加筆したものである．アメリカ人読者を想定したものであるため，日本人にとってはあまりに常識的な事実が多く含まれていることを，あらかじめ断っておきたい．

はじめに

江戸徳川時代は，1603年から1868年，266年の長きにわたった．その間の200年あまり，徳川幕府は鎖国政策を実施し，オランダ，中国以外の外国とは事実上関係を絶っていた．その2国ともに，幕府との通商は，長崎の出島でのみ許された．その地は，江戸から遠いうえ，出島を出ることを許されない外国人が，日本の民衆の目に触れることはそもそもなかった．徳川幕府は，日本人への西洋文明の伝搬を厳しく制限した．ことにキリスト教の普及を恐れる幕府は，1612年にキリスト教を禁じ，1639年の鎖国令をもって，その禁教を法令化し徹底した．徳川幕府は天上の主にのみに絶対の忠誠を求

めるその教えを，封建制への脅威だと考えていた．禁教は，江戸幕府が終焉を迎える明治維新後，1873年まで続いた．キリスト教とともに西洋知識の導入も，幕府学問所，就中蛮書調所以外では幕末まで禁じられていた．

1853年，4槽の蒸気船を率いた合衆国海軍のマシュー・ペリー提督が，江戸からそう遠くない浦賀に突然現れた．ペリーは友好条約の締結を求めるアメリカ大統領フィルモアの親書を携えていた．この要求に応えることは，日本が事実上鎖国政策を終焉し，合衆国に対していくつかの港を開くことを意味した．驚愕した幕府要人たちは，大混乱に陥り，唯一考えられた対応は，親書への返答を可能な限り長く引き延ばすというものだった．言語を絶して驚いたのは幕府要人ばかりではない．「蒸気船」を一目見ようと浦賀に押し寄せた庶民たちは，ひがな一日飽きもせず，その「奇態な」代物に見入っていた．江戸では「太平の眠りを覚ます上喜撰（茶名，蒸気船との掛詞）たった4杯（茶と舟の数詞）で夜も眠れず」という狂歌が人口に膾炙したが，そこからは幕府の狼狽ぶりをからかう庶民の余裕のユーモアが読み取れるだろう．庶民の当事者意識は，幕府より薄かったに違いない．

長期にわたった「平和な孤立」が，終わるときがやってきた．日本は1854年，抗うすべもなくついに「日米和親条約」を締結し，下田と函館の2港を開いた．下田，函館に一時的に逗留する米国人は，長崎におけるオランダ人，中国人と異なり，7里以内という制限こそあれ，その行動が制限されることはなく，和親条約は，米国に「片務的最恵国待遇」を与える不平等条約であった．開国後日本は，すぐさま他のアジア諸国が西欧列強によって侵略され，植民地化されている実態を学んだ．アジア諸国の運命を辿らないため，自国を守るために日本がなすべきことは，一日も早く西洋知識と技術を導入し，自らのものにすることであることは，火を見るより明らかであった．

本稿は，まず日本が近代産業国家に変貌するために，どのように西洋知識・技術を導入したか，また近代化達成の強力なエンジンは何であったのか，さらに，西洋知識・技術の導入，西洋文明への適応を容易にするために日本人が発明した思想について考察するものである．

日本における諸外国文明の導入

日本の長い歴史の中で，外国文明の導入は，幕末・明治期に限ったことではない．そもそも古代日本において，中国文明の膨大な流入があった．3世紀頃もっとも勢力のある氏族が台頭し，日本最初の政体大和朝廷が誕生したことは，多くの歴史家の合意するところだ（白石，2002，山尾，2005）．3世紀から6世紀にかけて，大和朝廷はその統治基盤を強化するために，漢字，思想・哲学から技術・工芸，政治・宮廷システムまで，ほぼすべてを中国文明から借用した．

日本と中国は朝鮮半島を通じて正式な国交があったが，5世紀の半島の政情の流動化が，半島から日本へ多くの亡命者を生んだ．彼らは中国の文物，技術に精通しており，この新たな知識の供給者は，「帰化人」として朝廷で重用された．宮廷は彼らの所属する新たな部署を創設した．技術部と歴史部である．技術部門で彼らは，織物，鞍，陶器などを制作し，歴史部では漢字を駆使して，行政記録，出納簿を作成し，史書を編纂した．これらが朝廷における官僚制の始まりと考えられているが，7世紀になると冠位十二階が制定され，官僚制はより複雑化する．貴族の官僚たちは，憲法や条例を作り中央集権化を進めてゆくが，法治とそれを実体化する官僚制による中央集権国家は，すべて中国をモデルにしたものだった．

古代の日本人は，アニミズム的心性を持ち，八百万の神を崇拝する多神教，いわゆる古神道が土着宗教であった．「やまとことば」は，例えば，消化器官を「ものはみ」「くそぶくろ」と名辞したように，叙述的，具体的性格を有し抽象性に乏しかった．6世紀に中国語で書かれた仏典が伝搬し，神道には不在の「抽象概念」が持ち込まれた．「慈愛」「尊崇」「理知」「論理」などの抽象語は，哲学的思考を促し，日本人の「頭の中」を変容させた．新思考によって開拓され広げられた脳は，自らの哲学と倫理を編み出すことを可能にした．

日本は最初の国家建設にあたって，中国の多大な恩恵を被ったが，国家の大々的な変容が，外国の侵略や征服の結果ではなかったことは，特筆に値する．変化は段階的，自主的におこり，哲学者和辻哲郎が言うように，日本の変身は，「さなぎが蝶に孵るように」自然

なものだった（和辻，1962：21）．

田丸徳善（1982）は，日本列島が地政的，地理的に，ユーラシア大陸の外縁に位置していることに着目し，日本は「文化の終着駅」であり，海外の文化潮流が自然に日本に流れ込んできたという．その点，自らの意志で，他文化，他文明に赴き，積極的にそれらと交わり摂取してきたノマドとは異なる心性を発達させた．また田丸は，外縁地域の文化的特徴として，「模倣」を挙げている．

だが明治期の近代化は，それが外部の圧力に起因し，しかも急激に起こったという点で，古代からそれまでの社会変容とは次元が異なる．電気，鉄道，電話，蒸気船，議会，海軍，民主主義，近代医学，その他，所謂「近代文明」のほぼすべてを欠いたアジアの小国が，短時間で西洋文明に追いつき，肩を並べようとするのは，決して容易い仕事ではなかった．日本人にとってそれまで経験もしたことのない，骨の折れる，困難で，忍耐を要する大事業であり，達成できれば，それはまさしく「奇跡」に近かった．しかし，日本は迅速な近代化に成功した．事実維新後10年の時を待たず，自らの手で鉄道や汽車を作り始めたのだ．次節で，いかにまたなぜ，歴史に類をみない短期間にそれが達成できたのかを考えたい．

日本近代化における「オヤトイ」外国人の役割

背景

1868年は，日本の近代化にとって記念すべき年である．というのもその年，新国家の方向性が決定されたからだ．その前年，ほぼ300年に渡り日本を封建支配してきた徳川将軍家は，自らの権威と統治権を天皇に返上した．いわゆる「大政奉還」である．1868年4月，新しい日本の統治者である明治天皇は，国家建設の基本方針を宣言した．天神地祇への宣誓でもあったこの「五箇条の御誓文」は以下の通りである．

一　広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ
一　上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フベシ

一　官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス
一　旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
一　知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

簡略に言えば，近代国家を建設するために，まず議会の設置，国民統合，人権確立，封建的弊習の廃絶，世界の知識の吸収と国際化が，重要不可欠であるという認識である．具体的に国際社会で近代国家として認められるには，ことに第4条，第5条が迅速に実現されることが重要視された．御誓文から10年とたたない内に廃刀令を発布して，武士の魂であった刀を帯びることを禁止し，断髪を促進した[1]．肉食が解禁されると，「スキヤキ」なるものが考案され，東京には瞬く間にすき焼き屋が増えた．封建的慣習は悪習として，ことごとく「西洋式」に取って代わられ，西洋式であれば何であれ，より高級で，洗練された文明だと喧伝された．文字通り「ザンギリ頭を叩いて見れば，文明開化の音がする」ようになったのである．

第5条は時をおかず着手され，西洋文物をいち早く導入するために以下の手段が取られた．

1.　外国に留学生，研究者を派遣する．
2.　西洋人の教師，技師を雇用する．
3.　洋書，新聞，雑誌を輸入し，日本語に訳す．

1に関しては，1867年から1874年の短期間に，575人が諸外国に送られた．その内訳はアメリカ合衆国：209人，イギリス：168人，ドイツ：82人，フランス：60人，その他8国：31人である（石附，1972：151，154）．送られた学生たちは，選りすぐられた優秀で勤勉なものたちだったが，語学の問題を抱えながら，まったく新しい学問領域に取り組む彼らが即成されて帰国するのは，現実的ではなかった．日本が切望してやまない西洋技術には，科学，数学，物理学の基礎が必要だが，それらの学習は日本ではなされておらず，日本人留学生が初歩から習得しなければならない知識の量は，深大かつ膨大であり，勤勉な日本人学生は昼夜を分かたず，寝食も忘れて勉強に没頭し，彼らの中には，文字通り「勉強死」するケースすらあった[2]．ほとんどの日本人留学生はその後帰国して，日本の近代化に貢献したが，学習が熟し，その目的が達せられるには，応分の時

間がかかった．実際彼らの活躍は，明治の後半まで待たなければならなかった．

日本政府は，手っ取り早い文明導入の解決法として，西洋人教師，技師を直接雇用することにした．彼らが「オヤトイ」と呼ばれる人々であった．実際，ジョーンズ（1980）が「生きた器械」と命名したように，彼らは日本の近代化になくてはならない「エンジン」として，明治日本で活躍したのである．

「オヤトイ」の性格と貢献

「オヤトイ」とは，明治政府や地方公官庁に雇用された外国人の総称である．

彼らは，教師，技師，助言者や相談役として，日本の近代化を助けるためにやってきた人々である．彼らは，教育，土木，機械，鉱山，電気，鉄道，電線・電話，造船，工場建設，海軍，陸軍，医学，衛生，財政，金融，商業，芸術，宗教，文化と，日本で西洋知を必要とするあらゆる分野で働いた．

とりわけ1870年から1885年まで，これらオヤトイの60％は，工部省に雇用されており，その分野が日本の近代化で一番必要とされていたことが分かる（バークス，1990：188）．次にオヤトイの雇用が多かったのは，文部省であるが，これは高等教育機関の設置許可の条件に，外国人教師の一定の率が義務づけられていたことと関わりがあるだろう（ジョーンズ，1987：163）．オヤトイの出身国は，イギリスが第1位，2位がフランス，3位がドイツ，続いてアメリカとなっているが，これは当時の世界の国々の工業水準をそのまま反映している（表1，2）．

初期のオヤトイは，往々にして宣教師であったが，明治政府が1873年にキリスト教の禁教を解除するまで，布教を禁じられていた．明治の初期までは，ジェネラリスト・タイプのオヤトイが主流であった．彼らは多くの分野に多才で，複数の科目を教えた．ギドー・ヘルマン・フリドリン・フルベッキやウィリアム・エリオット・グリフィスのようなオヤトイは，英語，法律，数学，化学を教える傍ら，求めに応じて外国関連のあらゆる事項にアドバイスをした．フルベッキなどは，外国人教師雇い入れ規則から，雇用契約書の作成

Year	Dajokan (Cabinet)	Cabinet	Imperial Household	Foreign Affairs	Law	Treasury	Interior	Engineering	Communication	Agriculture and Commerce	Development	Transportation	Marines	Army	Education	Prefectures	Total
1868	[60]							(7)							(1)	19	92
1869	[60]			1		(5)		(34)						(4)	6	23	133
1870	1		1	1		15	1	(135)					(7)	(9)	21	84	275
1871	1		1	3	1	29	4	209			10	19	(3)	(13)	40	128	461
1872	1		1	5	4	50	7	281			25	25	53	33	68	121	674
1873	2		1	6	5	45	15	310			30	2	72	42	90	82	702
1874	15		1	4	3	51	35	392			26	3	96	46	107	79	858
1875	16		1	4	3	48	48	397			21	16	66	53	75	56	814
1876	3		1	4	11	27	49	325			26	1	85	37	88	63	720
1877	2		1	4	11	17	51	259			22	1	69	29	56	49	571
1878	2		2	6	9	15	47	204			24	1	61	16	59	33	479
1879	1		3	6	9	12	47	184			18	1	51	14	58	40	444
1880	2		3	6	9	10	33	143			21		28	13	65	35	368
1881	3		3	6	5	8	24	108		7	18		25	6	52	24	289
1882	3		3	6	3	6	13	86		12			15	5	44	26	222
1883	4		3	7	4	4	13	64		12			13	6	42	24	196
1884	7		3	6	5	5	12	46		14			21	12	36	26	193
1885	8		3	8	5	4	13	36	13	15			24	12	35	25	201
1886		[25]	3	12	5	4	15		14	14			27	13	50	22	204
1887		[13]	4	10	6	4	21		9	9			8	15	56	17	172
1888		[12]	4	6	6	4	24		8	10			9	20	57	22	182
1889		[10]	4	5	6	2	14		8	10			9	12	55	28	163
1890		[10]	3	3	5	2	15		8	8			14	8	47	41	164
1891		5	4	2	7	2	11		8	7			15	8	49	63	181
1892		3	4	2	6	1	7		9	5			7	8	46	46	144
1893		3	4	2	6	1	2		9	4			6	7	42	15	100
1894		2	3	2	6		2		7	3			6	7	33	7	77
1895		1	3	2	5		2		8	2			5	5	34	7	74
1896			3	2	5		2		7	2			6	5	31	5	67
1897			3	2	4		1		6	2			6	4	44	4	76
1898			3	2	4		1		5	2			9	3	44	4	77
1899			3	2	4		4		5	2			6		45	4	75
1900			3	2	1		4		3	4			3		34	4	58
Total	191	84	81	140	161	375	537	3220	127	144	241	69	825	465	1610	1236	9506

表1　明治官雇外国人　年度別政府内部門（1868～1900）
（出典：ジョーンズ 1990年：219頁）

Year	Great Britain	France	Germany	U.S.A.	Netherland	China	Manilla	Italy	Austria	Russia	Denmark	Portugal	Canada	Belgium	Switzerland	Malay	Sweden	Finland	Korea	Spain	Norway
1868	20	58	1	7	4	1									1						
1869	43	67	3	9	7	4															
1870	111	90	16	22	18	7	3	2							2	4					
1871	223	111	25	51	27	16	8	2				1		1	1	4					1
1872	292	174	43	93	36	15	8	2	2	1	1	2		2	1			1			1
1873	354	142	51	85	33	13	3	2	2	4	3	3	1	2	1		2	1			
1874	433	145	62	94	34	17	46	2	5	3	6	3	2	1	1	1	2	1			
1875	386	139	53	86	35	36	54	4	5	1	5	3		1			2	1			
1876	362	113	57	76	34	40	15	8	2	3	3	4						1			
1877	286	90	44	65	28	28	12	7	1		4	3					1				
1878	255	63	38	61	20	18	5	5	3	4	3	2					1				
1879	232	50	46	64	19	10	5	6	3	4	2	2									
1880	168	43	47	63	17	8	4	8	2	4	1	1			1						
1881	135	22	50	53	9	4	3	6	2	2	1	1			1				1		
1882	103	18	41	32	7	6	3	4	2	1	1		1		2						
1883	92	17	34	28	6	5	1	2	2	1	1		1		2				2		
1884	86	18	40	24	7	6	1	7	1			1	1						1		
1885	89	18	45	25	7	7	1	4		1		1	1	1					1		
1886	64	21	59	22	3	4		5		1		3	1	1							
1887	59	21	60	19	4	1		5		1				1			1				
1888	54	22	65	27	3			6		1			3	1							
1889	56	18	51	26	3			4		1			3								
1890	62	13	49	32	1			2		1			3								
1891	71	17	42	36	1			2	1	1			7		1	2					
1892	67	12	26	28	1			2	1				4		1	2					
1893	40	11	32	11	1			3	1					1							
1894	30	11	23	8	1			2	1					1							
1895	29	12	17	12	1			2						1							
1896	30	9	14	10	2			1						1							
1897	28	10	22	12	2			1						1							
1898	29	9	22	12	2			1						1	1						
1899	27	8	25	10	1			1						1	1					1	
1900	17	6	20	10	1			1						1	1					1	
Total	4353	1578	1223	1213	377	246	172	109	36	35	31	30	28	19	18	13	9	5	5	2	2

表2　明治官雇外国人　年度別国籍（1868～1900）
（出典：ジョーンズ 1990年：220頁）

まで監修した．明治も中期になると，スペシャリスト・タイプのオヤトイが徐々にジェネラリストと入れ替わっていったが，広義には，外国人はすべて日本人の外国情報源の役割を担った．

オヤトイの年齢は，26歳から30歳，31歳から35歳が一番多く，彼らは若い開拓者であり，理想家が多かった．その中には「新生日本の創造者」を自任していた者もある．キリスト教徒のオヤトイは，日本での仕事を，使命あるいは召命と考えたが，桁違いに高額な年

	Dajokan (Cabinet)	Cabinet	Imperial Household	Foreign Affairs	Law	Treasury	Interior	Engineering	Communication	Agriculture and Commerce	Development	Transportation	Marines	Army	Education	Prefecture	Total	%
Below $50							5	132	3		12	3	3	4	3	31	196	
$50	3					10	8	113			8	5	27	3	12	34	223	74%
$100	32			3	5	11	12	352	1	1	25	13	90	32	64	46	687	
$200	5	12	6	5	4	21	9	96	4	3	22	28	29	26	103	44	417	
$300	5			2	5	11	20	61	4	4	8	2	12	23	74	27	258	19%
$400	5	4	1	5	3	4	13	35	2	3	3		8	7	21	13	127	
$500	3	1			5	8	5	13	1		2		4	3	5	3	53	
$600	6	6	1	1		7	2	10	1	1	1		1	5	6	2	50	
$700	1	2						2	1						1	1	8	
$800	2			2			1	5			3		1				14	
$900		1		1				1									3	7%
$1000	1			2	1	1		3									8	
$1200				1	1			1									3	
$1300		1															1	
$1800													1				1	
$2000								1									1	
Total	63	27	8	22	24	73	75	825	17	12	84	51	176	103	289	201	2050	

表3　明治官雇外国人　月給（1868～1900）
（出典：ジョーンズ 1990年：226頁）

俸は彼らにとって非常な魅力であったことは間違いない．東京大学で動物学を教え，「進化論」を日本に紹介したエドワード・シルベスター・モース[3]は，ハーヴァード大学の同窓生のアーネスト・フランシスコ・フェノロサに，日本に来れば，上流の生活ができる上，年俸の半分を貯金でき，日本の最高学府での教職経験は，米国帰国後のよい就職を約束すると書き送り，来日を促している．グリフィスも来日の動機を「日本に行けば，定期的に家族に送金できるから，家族は家賃を賄えるだけでなく，新しい絨毯を買うことが出来る．望めば床自体を換えることだって，もっと良い家に家族を移すことだってできる」と正直に告白している[4]．

事実，明治政府がオヤトイに支払った給与の総額は，最高の年には，国家予算の3分の１を占めた．表3に明らかなように，上位7％のオヤトイの月給は，500ドルから2000ドル，平均で1200ドルになっている．次の19％は，月額300ドルから400ドル，残りの74％が200ドル以下となっている．しかし，アメリカの当時の船長の月給が60ドル程度であったことを考えれば，日本のオヤトイの給与が例外的に高額であったことがわかるだろう．アメリカの船長が，もし日本で雇われていたら，彼は容易に月350ドル以上の給与を得たはずである．

もっとも高額の給与を貰ったオヤトイは，イギリス人で技師のウィリアム・W.カーギル（滞日1872－1877）で，彼は日本の鉄道建設の設計から敷設に渉る監修・監督をした．彼の年収は24000ドルと破格で，この給与は首相の給与を上回る．2位は13000ドルのアメリカ人のホーレス・キャプロン（滞日1871－1874）で，アメリカの農法を教え指導した．3位のアメリカ人エラスタス・ペシュイン・ス

ミス（滞日1871－1877）は，ハーヴァード・ロー・スクールで国際法を学び，外務省のアドヴァイザーとして，年収10000ドルを得た．4位のアメリカのトーマス・アンティセル（滞日1871－1874）は8000ドルを得て，日本の新しい貨幣である紙幣の開発，印刷を監督した．これら4人の給与はオヤトイの平均給与をはるかに上回るが，そのことは，彼らの分野，技術が時代の一番の要請であったことの反映である．徴税システムはまだ完備されておらず，歳入のない貧しい国家予算の中から，明治政府は高額なオヤトイの給与を払い続けた．列強植民地主義の脅威から自らを守るため，近代化をいち早く達成することが，日本にとって喫緊の課題であったのである．

オヤトイの役割は，公官庁，学校，大学，現場，あらゆるところで，日本人を教育し，過去に例を見ない早さで彼らが近代化を達成するのを手助けすることだった．1876年から1912年までに，オヤトイが東京大学で教えた学生の数は12,235人に達し，そのうち33％は法の分野，23％が工学分野，16％が医学，13％が文学，9％が農学，6％が自然科学のエキスパートとして指導的立場にたった．加えてオヤトイが私立学校で教えた学生の数は，計り知れない．1916年，オヤトイの教育を受けた杉山直次郎が，日本人初の法学者として東京大学法学部の教壇にたった（ジョーンズ，1987：158）．エール大学ロースクール出身のヘンリー・T.テリー（1876－1912）の教えを受けて，日本の法の第１人者となった穂積八束は，明治憲法の立案，制定に多大な貢献をした．テリーが教授したジョン・オースチン理論からの自治概念は，穂積の理論的支柱となったし，エドワード・モースが紹介した「社会ダーウィニズム」からも大きな影響を受けた（ジョーンズ，1987：163）．

R.ヘンリー・ブラントン（1868－78）は，日本のほとんどの灯台を設計，施工した．ウィリアム・アヤトンは電気を日本に紹介し，東京大学工学部で教えた．彼の妻のマチルダは，日本で最初の助産婦養成学校を開いた．

以上に言及したオヤトイ以外に，数えられないほど多くのオヤトイが，日本の近代化に貢献した．明治政府の彼らへの依存度は非常に高かったが，事実彼らの存在と貢献なしに，歴史に類をみない早さで達成された日本の工業化，近代化は，不可能であったと思われる．日本は諸外国の侵略を免れたばかりでなく，1905年には日露

戦争に勝利して，アジアの最強国となった．それは明治天皇が宣誓を発した37年後，鎖国政策から開国に転換してわずか48年後に，日本が西洋列強とほぼ肩を並べたことを意味した．

オヤトイの他の貢献として，日本を広く世界に紹介したことがあげられる．封建制下の長きにわたる世界からの孤立よって，日本の実像はほとんど世界に知られていなかった．オヤトイは帰国後，彼らの日本での経験と洞察を出版して，ジャパノロジストの役割を果たした．この典型例がウィリアム・グリフィスである．彼が著した『皇国』(1876）は，第1部の日本の歴史と，第2部のオヤトイとして彼が観察，洞察した当時の日本の様子からなっているが，時代のベストセラーとなって，読者に日本を知らしめた．デヴィッド・モルレーの『日本』(1894)，エドワード・モースの『日本その日，その日』(1917）は，学者が書いた知的な読み物として，エドワード・ウォーレン・クラークの『日本における生活と冒険』はエキサイティングな旅行記として，広く西洋の読者に受け入れられた．彼らはこうした書き物を通じて，文化の運び手，文化大使の役割を担い，西洋読者の日本に対する知見と理解を深めたのだった．

特筆すべきオヤトイ

ギドー・フルベッキ（1830－1898，滞日1859－1898）は，日本が開港するや，オランダ改革派教会の宣教師としてやってきた，もっとも初期のオヤトイである．来日当時，キリスト教はまだ禁教であったので，長崎で英語と合衆国憲法を教え始めた．政治，法律，外交，経済，文学の知識を持ち，数学や工学までも教えられる多才なオヤトイとして突出しており，東京に移ってからは，明治政府の顧問として重用された．グリフィス（n.d.: 5）によれば，新生日本の国家建設に，かれほど貢献したオヤトイはいない．

フルベッキはまず，天皇の使者として世界に使節を派遣することを提案し，実際の計画をたてた．それが1872年の岩倉使節団で，彼らが出発したとき，そのメンバーの半数は，長崎で彼が教えた生徒たちからなっていた．江戸末期から明治の始めにかけて，約500人の留学生が海外に送られたが，その半数は，フルベッキの周旋によるものだった．

写真1　フルベッキと塾生たち（長崎）（出典：パブリック・ドメイン）

フルベッキは，ドイツ医学の優位を認識していて，オランダ医学に代わるものとして，その採用を強く上奏した．また彼の助言の大きな成果のひとつに「廃藩置県」があり，これは近代国家の礎を築いた最重要な改革のひとつだった．

フルベッキは「祖国を持たない男」と呼ばれていた．生まれ故郷のオランダも，移住したアメリカも市民権を得る前に去っていたからだ．明治天皇はフルベッキに，「皇国における自由」を与えた．それは，外国人に前例のない永住許可証であった．また彼は天皇から「旭日章」の勲章を贈られた初めての外国人であった（Griffis n.d.: 6）．

東京で彼が亡くなったとき，天皇は彼の葬儀のために特別に250ドルを下賜した．葬儀には，大臣，華族，将軍などあらゆる日本の貴顕が参列し，彼らを訓練してくれた「国家の友」を見送った．葬儀はさながら国葬の様相を呈していた（Griffis n.d.: 7）．

デヴィッド・モルレー（1830－1905，滞日1873－1878）も，日本の教育制度を開発した偉大なオヤトイだった．モルレーはラトガース大学の教授であり，行政者でもあった．ニュージャージー州にある当校は，フルベッキの周旋で，日本からの留学生の第１波が勉強したところだった．彼らと親しく接したモルレーは，彼らから日本人

写真2　ダビッド・モルレー（出典：パブリック・ドメイン）

の気質や傾向を学び，親日感情を抱いていた．

当時ニューヨークで小弁務士（領事）を務めていた森有礼の依頼により，モルレーは日本の教育改革の提案を書き上げた．「日本の教育」と題された提案書が，岩倉使節団の目にとまり，モルレーは，文部大臣田中不二麻呂の特別顧問として，日本に招聘された．日本の教育改革についてモルレーは5つの原則を提案した．

1. 教育制度は日本人の特性に合うべきものであること．
2. 身分を問わず，子どもたちは同等の教育を受ける（国民皆学）．
3. 女性も男性と同等の教育を受けること．
4. 教育は実際的で，かつ規律あること．
5. 教育に適する設備を整えること．

写真3　アーネスト・フェノロサ（出典：パブリック・ドメイン）

モルレーの原則は，東京大学，東京女子師範，その付属幼稚園，日本学士院の設立に結実し，日本の教育の向上に多大な貢献となった．モルレーが日本を去るにあたっては，彼の栄誉を祝すため天皇までが出席するという異例のバンケットが開催され，天皇から「お言葉」が与えられ，「旭日章」の栄誉に浴した．

最後に取り上げるのは，アーネスト・フランシスコ・フェノロサ（1853－1908，滞日1878－1890，1896，1898，1901）である．フェノロサは東京大学で哲学，倫理，政治学，経済学を教えるために来日した．フェノロサが東京大学で，ドイツ哲学，とりわけヘーゲルを講じたのは，彼が弱冠25歳のときだったが，それ以後ドイツ哲学が日本の学会の主流となってゆく．彼の学生の中からは，後に日本の学会，官界で指導的立場を占めるものがあまた輩出されたが，東京

大学で初の日本人哲学教授，井上哲次郎はその好例であろう．

彼の日本への最大の貢献は，急激な西洋化の中で片隅に追いやられ，まったく顧りみられなくなっていた日本の伝統美術の再評価である．フェノロサが「美術行政」という概念を紹介し，その制度の実現に邁進しなかったら，どれほど多くの日本の伝統美術工芸作品が永遠に失われていたか計り知れない．具体的に言えば，東京美術学校（現東京芸術大学）の設立と「古社寺保存法」（現「文化財保護法」）の成立は，彼の尽力の賜物である．「国宝」という概念も彼が日本に植え付けたもので，帰国後は美術評論家として*Epochs of Chinese and Japanese Art*（New York: Frederick A. Stokes Co., 1912）を出版する傍ら，ボストン美術館の東洋部部長として，日本美術の西洋における紹介，普及に終生務めた[5]．

明治天皇は皇居にフェノロサを招いて，彼が日本美術の真の価値を日本人に知らしめたことに，感謝の言葉を述べた（Chisolm, 1963: 41-67）．事実，フェノロサは文字通り日本伝統美術の救世主であった．彼は1908年ロンドンで客死したが，遺言によりその灰は，彼が仏教徒としての戒を受けた滋賀県の円城寺に葬られている．

「和魂洋才」というイデオロギー

オヤトイの貢献は，大いに感謝されたが，日本政府の彼らの取り扱いは，実に巧妙であった．日本は迅速な技術の進歩と近代化の達成のために，比類のないほど外国人の助力を求めたが，同時に外国人のいかなる干渉も望まなかった．ことに彼らが享受する「治外法権」には，ことさら神経を尖らせ，外務省は日本における彼らの行動を規制するため，非常に細かい外国人就業規則集成を作り上げた．政府はオヤトイと通常1年から3年の短期契約を好んだ．短期での解約を担保するためだ．規則はオヤトイ契約期間の給与の全額を政府が支払えば，彼らをいつでも解職することが出来ると定めている．そうしておけば，雇用契約期間中であれ，政府に不都合があったり，オヤトイの適性しだいで彼らを解雇することができたからだ．

オヤトイは商取引に関わることを禁じられ，土地を所有することも出来なかった．彼らは政府指定の場所に居住することを義務づけ

られ，旅行するにも許可が必要だった．まれに指定区以外での居住を許されるオヤトイもいたが，その場合は「治外法権」は剝奪され，住民税を支払い，日本の刑法が適用された．つまり，オヤトイたちは，完全に日本政府の統制下にあった．

グリフィスによれば，オヤトイには二つのタイプがあった．「助手タイプ」と「司令官タイプ」である．後者はしばしば日本の役人と諍いを起こした（ジョーンズ，1990：232-233）．例えば，ウォーレン・クラークは有能なオヤトイだったが，宣教師としての強い使命感から，日本のキリスト教の禁教を公然と批判したため，契約は更新されなかった．役人たちは，好んで「助手タイプ」のオヤトイを雇用した．

オヤトイの中でも高官であったボアソナードは，日本近代法の父として多大な尊敬を受けたが，彼が法廷に外国人判事を導入すべきだと主張したとき，それは即座に却下された．オヤトイの4分の1は，高度な専門家であったが，広義にはすべてのオヤトイは情報供給者であり，日本人はたえず情報を求めるものだった．だがその情報をどう使うかは，日本人自身が決めた．外国人の教師や助言者たちが，いかに敬意を払われようが，彼らは「生きた器械」（ジョーンズ）と見なされ，「主人」である日本人に「仕える」ことを期待された．事実，オヤトイの一番の成功例である，ギドー・フルベッキは，日本の政府高官にとって「理想の家来」と見なされた．

西洋技術の優位は疑う術もなかったし，それを得ることは日本の死活問題であったが，日本人が「主人」としてオヤトイの上に立つためには，自らの「優位性」を強調し，印象づける何かが必要であった．明治日本は，西洋文明を導入しつつも，自らの優位性を維持する装置を必要としたのだ．そこで「発明」されたのが，「和魂洋才」（日本精神・西洋技術）というイデオロギーであった．「日本精神」と「西洋技術」は表現上はパラレルだが，精神が肉体を治めると考え，そのように訓練されてきた日本人にとって，精神の優位性は揺るぎないものだった．

パイルはこれに関する興味深いエピソードを紹介している．首都から遠く離れた熊本に，1871年，「熊本洋学校」が設立された．設立に出資した徳富家は，そこで教えるために来日したオヤトイ，ウェスト・ポイントの卒業生であるランシング・ジャンズ大佐に，彼

のカリキュラムから「西洋倫理」を外し，「西洋技術」だけを教えるよう告げた．日本の伝統倫理が，それに合わせて教えられるということだった（Pyle, 1969 : 28）．

宗教社会学者のロバート・ベラーは，彼の「徳川時代の宗教」の中で，明治以前の徳川封建制の数世紀の間に，日本人は「武士道」という高度に様式化された精神を結晶化させたと指摘している．

> 武士道，つまり武士の生き方は，徳川時代あるいは近代日本の価値および倫理のいかなる研究にも，とくに大切である．というのは，武士，あるいは士が中心的な日本の価値を体現し，あるいは体現していると信じられたからであり，また事実，武士道の倫理が徳川時代および近代において国民倫理となり，あるいはすくなくとも国民倫理の大部分を占めていたからである．（ベラー，1996：183）

武士の倫理は，忠誠，克己，禁欲に特色づけられている．主君に奉仕して死ぬことは，武士にはもっともふさわしい最後だと考えられていた．あわせて無私の献身，禁欲的生活は，武士の究極の義務であった（ベラー，1996：189）．主君だけではなく，主君が治める社会への同様の献身は，武士を真の意味で「公僕」にした．克己と禁欲は，日常生活では，ことに倹約と勤勉の実践としてあらわれた．山鹿素行は武士のための入門書『武教小学』の中でこう言っている．

> 武士は早寝早起きをし，常に正しい言葉を用い，瑣末なことに走らないようにと教え，また，簡素な食事と衣服を恥じず，安楽な生活を望んではならない．

吉田松陰はこれに加えて，武士の休息は，死後のみであるという．以上のようなモラルは武士を特徴づけるものでありながら，武士に限定されず，庶民階級にも浸透して，ある種の国民道徳になっていたという．その例をベラーは商人や農民に広く実践された「石門心学」に見ている．日本で実践されたこのような倫理体系の総体をベラーは「徳川宗教」と仮定したが，これはマックス・ウェーバー（1930）が分析の対象としたプロテスタントの倫理と相通じるとこ

ろがあろう．

江戸時代に結晶化した精神主義は，明治時代にも継続しており，「和魂洋才」の基盤を提供したと考えられる．だが，和魂洋才を謳うだけなら，それはプロパガンダにすぎない．それがイデオロギーとなって実践されるには，確実な運営主体が必要である．この点に関しては，テツオ・ナジタ（1974）の封建官僚制の遺産に関する議論が，一定の解答を与えてくれるかもしれない．彼は明治近代化の成功は，徳川封建制下の盤石な官僚制がその基盤にあったと主張している．

徳川時代の官僚とは，その地位と能力によって，将軍あるいは，藩主の禄を食む武士たちである．武士道の倫理には，学問への尊崇があったから，すべての武士は読み書きができ，古典に通暁していることが望まれた．つまり彼らは，武士（もののふ）であると同時に，時代の教養人でもあった．徳川の行政府は，勘定方，普請方，賄方，儀典方など，多岐の部門に分岐し，しかもそれぞれが高度に専門化していた．藩も幕府をモデルにしており，規模の大小はあれ同様の機能を果たした．各部門に務める武士は，高度にエキスパート化しており，なおかつ職責は世襲であったから，子どもの頃からその道の訓練に励み，長じては，有能なエキスパートとなった．

明治政府が誕生して，時を移さず新たな行政府が創設できたのは，旧幕府の行政府の遺構の御陰と言っても過言ではない．かつての「勘定方」は「大蔵省」に名前は変わっても，そこには良質なエキスパート集団が存在していたし，各藩のエキスパート集団も控えていたから，有能な働き手に不足はなかった．もとより勤勉でモラルの高い武士たちが，献身的な公僕，有能な官僚群に変身するのに時間はかからなかった．アジア諸国で唯一，あからさまな西洋諸国の干渉を排除しながら，必要なものを摂取し，いち早く近代産業国家に変貌できた理由が，そこに見つかるだろう．よく組織された官僚制は，和魂洋才のかけ声の元，西洋技術を摂取，消化する一方で，伝統的価値と倫理の維持に務めた．

こうした歴史を見てくると，古代に文字，政治制度，税制，宮廷制度など，中国文明のほぼすべてを摂取しながら，日本は「中国ナイズ」されなかったし，明治日本が完全に「西洋ナイズ」したわけでもなかった．日本は独自のやり方で異文化，異文明を導入，消化

し，自らの文化，文明を豊かにしてきた．それを異文化・異文明摂取の一つのモデルと考えても，あながち間違ってはいないだろう．

［**注**］

1　廃刀令（1876年）

2　その最たる例はラトガース大学理学部に留学した日下部太郎である．彼は卒業を目前に控えた1870年に亡くなったが，日本人として初めてファイ・ベータ・カッパーの会員となった．

3　彼は大森貝塚の発見者であり，日本に考古学と人類学を紹介したことでも知られている．

4　Griffis Family Paper Correspondence To Margaret Clark Griffis.

5　後にその役職は彼の東京大学時代の教え子でもある岡倉天心（『茶の本』の著者）が継いだ．

［**参考文献**］

石附実『近代日本の海外留学史』ミネルヴァ書房，1972年．

ジョーンズ，ヘーゼル「生きた器械の再訪」嶋田正編『ザ・ヤトイ――お雇い外国人の総合的研究』思文閣出版，1987年：153-165頁．

ジョーンズ，ヘーゼル「グリフィスのテーゼと明治お雇い外国人政策」アーダス・バークス編『近代化の推進者たち――留学生・お雇い外国人と明治』梅渓昇監訳，思文閣出版，1990年：211-240頁．

白石太一郎編『倭国誕生（日本の時代史）』吉川弘文館，2002年．

田丸徳善「西洋思想の受容と宗教」野田又夫，田丸徳善，峰島旭雄編『近代日本思想の軌跡――西洋との出会い』北樹出版，1982年：26-38頁．

バークス，アーダス「西洋から日本へ――お雇い外国人」アーダス・バークス編『近代化の推進者たち――留学生・お雇い外国人と明治』梅渓昇監訳，思文閣出版，1990年：179-199頁．

ベラー，R.N.『徳川時代の宗教』池田昭訳，岩波書店，1996年．

山尾幸久「ヤマト王権の胎動」金関恕，森岡秀人，森下章司，山尾幸久，吉井秀夫『古墳のはじまりを考える』学生社，2005年：7-52頁．

横浜開港資料館編『ペリー来航と横浜』横浜開港資料館，2004年．

和辻哲郎『和辻哲郎全集　第12巻――日本倫理思想史　上』岩波書店，1962年．

Bellah, Robert N. *Tokugawa Religion: The Values of Pre-Industrial Japan*, Glencoe, Illinois: The Free Press, 1957.

Chisolm, Lawrence W. *Fenollosa: The Far East and American Culture*, New Haven: Yale University Press, 1963.

Clark, Edward Warren. *Life and Adventure in Japan*, New York: American Tract Society, 1878.

Fenollosa, Ernest Francisco. *Epochs of Chinese and Japanese Art*, New York: Frederick A. Stokes company, 1912.

Griffis, William Elliot. "Four American Makers of Japan," undated, unpublished typescript, Box 70, folder 12, William Elliot Griffis Collection, Rutgers University, n.d.

Griffis, William Elliot. *Mikado's Empire*, Philadelphia: Harper & Brothers, 1876.

Jones, Hazel J. *Live Machines: Hired Foreigners and Meiji Japan*, Vancouver:

University of British Columbia Press, 1980.
Kawakami, Tasuke. “Bushido in Its Formative Period,” *Annals of the Hitotsubashi Academy*, 1952: 65-83.
Morse, Edward Sylvester. *Japan Day by Day, 1877, 1878-79, 1882-83*, Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1917.
Murray, David. *The Story of Japan*, New York: G. P. Putnam’s Sons, 1894.
Najita, Tetsuo. *Japan: The Intellectual Foundations of Modern Japanese Politics*, Chicago and London: University of Chicago Press, 1974.
Pyle, Kenneth. *The New Generation in Meiji Japan: Problems of Cultural Identity, 1885-1895*. Stanford, California: Stanford University press, 1969.
Weber, Max. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, translated by Talcott Parsons, London: Allen and Unwin, 1930.

Copyright © The Comparative Civilizations Society of Rikkyo University